

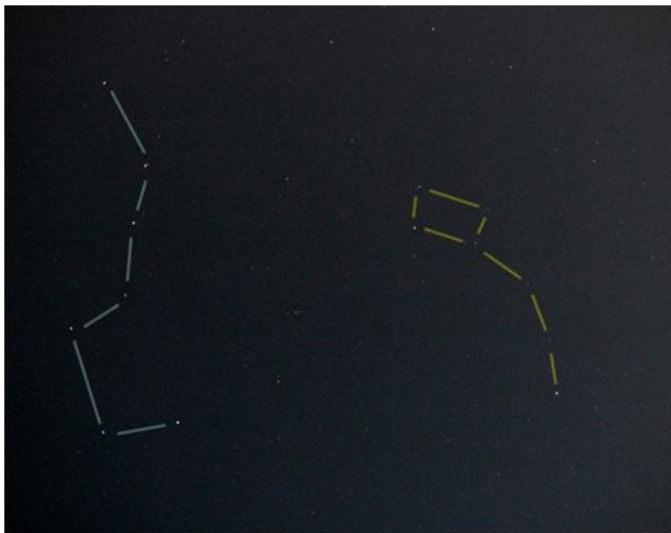
## 「友人と星を撮る (2)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

今回の天体写真は、デジタル一眼レフカメラと三脚だけで撮影した。専門的な機器(赤道儀・追尾装置・天体望遠鏡など)も使わなかった。恒星は、地球の自転によって日周運動をするので、ほんの十数秒でも、星は動いて写ってしまう。しかし、北天の星(北極星に近い星)は角速度が遅いので、広角レンズなら比較的長時間露光しても、恒星は天像に写る。



これは「北斗七星とこぐま座」。「北斗七星から北極星を探す」という方法の説明に使えるような構図だ。カメラのファインダーを覗いても、2等星以下の星はなかなか見えない。同行の友人は、狙った星野(せいや)の構図決定に苦心していた。北斗七星はおおぐま座の一部だが、こぐま座は星座全体が柄杓(ひしゃく)の形を成し、「小柄杓」とも呼ばれる。



「北斗七星」はほぼ一年中見られるが、位置的には春～初夏が一番見やすい。ふたご座は「冬の終わり～春」の星座である。ふたご座は東の空から昇って来る時は、頭を下にした「逆立ち」の格好である。しかし天球を半周して、西に沈むころには、「二人とも」足を下にした、正しい形になる。



右が $\alpha$ カストル、左が $\beta$ ポソックス。ほとんど同じ明るさなので「ふたご座」なのだが、実は兄のカストルは2等星、弟のポソックスが1等星である。恒星のギリシア文字符号は、通常明るい星から $\alpha \beta \gamma \dots$ と振るが、ふたご座では $\alpha$ と $\beta$ が逆転している。

